

テキスト表示へ

東 興 日 津 民

2004年(平成16年)8月24日 火曜日

第40586号

(第三種郵便物認可)

今は昔、昔は今の風景が、豊かな情緒をたたえ、時間を越え、心やすらぐ懐かしさとなって読者の胸によみがえる。

「蓮花」の、富田の名水や色町の名残を留める紙漕町の下宿、「秋色」の万茶軒喫茶店など、弘前や津軽の地名や場所が懐かしく、

書評

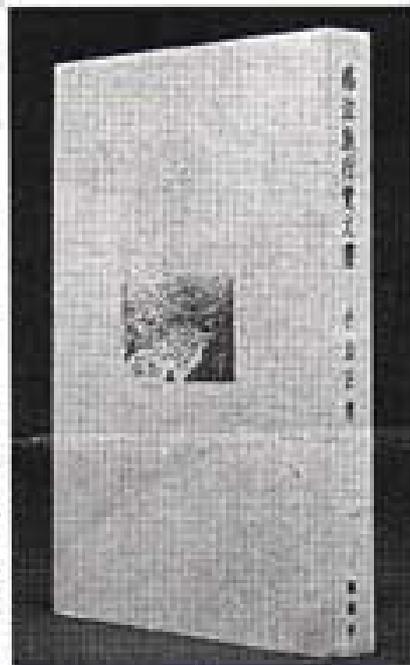
ぼくなどにはもうその末期の記憶が残っているだけに、まるでいまその場に居合わせるかのよう、男と女の探り合いや絡み合いに胸をときめかし、ともに濃厚な空気を感ずく。

「秋色」にはまた、いかにも旧制高校生らしい初々しい観念のロマン主義があ

心やすらぐ懐かしさ

小笠原茂介

小山正孝著「感泣旅行覚え書」



「感泣旅行」が胸を刺す。

ることおもうと、鋭い嗅覚（きゅうかく）に伴われた心理描写、とらとらとした青臭い内面の告白もあって、当時の日本の一流の私小説のあれこれと比べても遜色（そんじょく）がない。書名となった「感泣旅行覚え書」の前後編が、長大な第二、三部を構成するが、作者にとって津軽は第二の古里ともいうべきが、こゝでも弘前や浪岡や金木や十

三や大崎などへの追憶のセンチメンタルジャーニー。これが今回世に出された

それ わってゐる。

かの二人が内裏様になっ

中央二流の出版人である

てしまったように感じる。

は詩「ユリイカ」の伊達得夫と

そして古くなった櫃の背中

下間の会話で、彼のいわゆる歌

に火をつけて焼くという風

の 後詩と、作者や村次郎、小

淵を一人とも同時ににおも

に東 山弘一郎たちが絶（よ）る

だす。

は地 詩誌「山の樹」との埋める

やがて背の始が首に移り

々木 ことができない距離があら

僕の首が落ちる

かで わにされる。さらに、いま

お前のつぶらな瞳の白い

いう も無名の詩人の「村中剛太

願が傾く

じつ 郎詩集」を一冊もちたいと

この鬼気迫るイメージも

こそ いう願ひ、作者生涯の生と

また愛の究極の姿の一つ、

作家 文学にかける思いとその立

その絶唱といえよう。

高い 脚点が、ここに明示された

(詩人・ドイツ文学者、弘

といえよう。

前市)

山弘 補遺として最後に拾い上

※著者小山正孝氏は一九

「村 げられた詩六編(と)、現代

一六年東京都生まれ、詩人

原道 中国詩からの訳詩八編)も

旧制弘前高校で青春時代を

貴重 重なる遺産というべく、な

過す。二〇〇二年、八十

事情 かも詩「対岸」と「内裏

六歳で死去。「感証旅行覚

それ 醒」の感証な情念は忘れが

え書」は橋流社(電話03

なが たい。

・3580・5670)刊

な伝 後詩では快速の電車のな

・三、五〇〇E。